

2023年3月27日

2022年度「障害者スポーツ調査研究報告書」を発行

当財団は 2022 年度版「障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究」の報告書を発行いたします。

本報告書は全国の障害者スポーツ関係機関等へ配布の他、当財団ウェブサイトでも公開します。

<https://www.ymfs.jp/survey/019-social-environment/>



■報告書タイトル

「**障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究**」

－ 選手のキャリア、TV放送、選手認知度、テレビCF放送、ユニ★スポ体験の効果に着目して －

■報告書の概要(全5章で構成)

【第1章】 障害者スポーツ選手のキャリア調査

障害者スポーツ選手のスポーツを始めるに至った経緯や活動状況について、2022年度実施の11人の報告、および今年度までに調査した50名の中間報告を掲載。

【第2章】 テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査

冬季パラリンピック北京大会前後での、障害者スポーツのテレビでの露出状況(放送時間、番組傾向、トピックス)を調査。

【第3章】 パラリンピアンに対する社会的認知度調査

冬季パラリンピック北京に出場した選手の社会的認知度を調査。

【第4章】 テレビコマーシャルによる障害者スポーツ情報発信環境調査

2008年から2021年までの、障害者スポーツ関連やパラアスリート起用のテレビコマーシャルの実態を調査。

【第5章】 ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

障害者スポーツをユニバーサル教材として活用した体験事業の結果より子どもたちの意識や行動の変化を1年にわたり追跡調査。

【執筆責任者コメント】 藤田紀昭 (日本福祉大学 スポーツ科学部 教授)

障害者スポーツ選手のキャリア調査では4年間、50人のデータを分析した結果得られた、新たな知見も掲載。テレビメディアによる障害者スポーツ発信環境調査、パラリンピアンに対する社会的認知度調査、テレビコマーシャルによる障害者スポーツ情報発信環境調査はパラリンピック開催時に定点的に実施している調査。この間の障害者スポーツのメディアでの取り上げられ方の変遷を確認することができます。ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査ではパラリンピック、パラスポーツを使った教材が共生社会実現に寄与できる可能性を示唆しています。是非ご一読いただき、ご意見、ご批判お寄せください。

この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:大庭)

www.ymfs.jp

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500
TEL: 0538-32-9827 FAX: 0538-32-1112

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

2500 Shingai, Iwata, Shizuoka, 438-8501 Japan
Tel: +81 538 32 9827 Fax: +81 538 32 1112

【参考資料】 報告書の主なトピックス

■ 第1章 『障害者スポーツ選手のキャリア調査』より抜粋

- 2019年度より本年度迄に実施した合計50名のインタビュー調査から中間総括を行った。パラアスリートのスポーツへの社会化(どのようにしてスポーツをするに至ったか)および競技の継続に関して、7つの視点(条件)が重要であることが明らかになってきた。

■ 第2章 『テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査』より抜粋

- 過去の冬季4大会の合計放送時間は、大会バンクーバー大会が35時間27分13秒、ソチ大会が72時間5分15秒、平昌大会が113時間28分40秒、北京大会が79時間18分26秒と、平昌大会で増加した放送時間は、北京大会で減少した。

■ 第3章 『パラリンピアンに対する社会的認知度調査』より抜粋

- 北京パラリンピック日本代表選手で最も認知度が高い選手は「村岡桃佳」(11.6%)で、ついで、「岡本圭司」(5.6%)、「小栗大地」(4.5%)、「川除大輝」(4.2%)、「新田佳浩」(4.1%)、「高橋幸平」(4.1%)であった。
- 北京パラリンピックの観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(31.3%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(7.7%)であった。

■ 第4章 『テレビコマーシャルによる障害者スポーツ情報発信環境調査』より抜粋

- 障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル、パラアスリート起用のテレビコマーシャルと2つの調査を実施したが、いずれの調査結果からも2016年からテレビコマーシャル本数が急増したことが明らかとなった。

■ 第5章 『ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査』より抜粋

- 『ポッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。
- 体験会終了後の1年間について、ポッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童を比較すると、継続して実施した児童の方が障害イメージや障害者スポーツに対するポジティブイメージが醸成されていくことが示唆された。